

月刊しにか
1990.12

中国語辞典雑感

中嶋嶺雄

私のように、中国を研究対象にしながらも、中国語学の専門家でない者が、中国語の辞典について何か語るなどは、大変おそれたことであるので、どうか専門家の方には、厳しく御叱正願いたい。

冒頭から、このようなことを申すからには、いささかの理由がある。私は、この夏、オーストラリアに滞在中に、必要あって中国の神話や古い伝奇に関する文献を読まなくてはならなくなり、出がけに急いで次男の机上にあった中日辞典を靴に入れて旅立った。いつも愛用しているウェード式と注音符號の素晴らしい辞書、井上翠著「井上 中国語新辞典」(江南書院)や私の恩師・鐘ヶ江信光先生の手になる「中国語辞典(大学書林)」を信州の山荘に置いてきてしまったからである。ところが、私が携行した辞典は、増訂部分が全体の三分の一にもなっている。旧版のページと双方を引かねばならず、実に使いくいいうえに、簡体字に出ていないものが多く、また難しい繁体字にも遺漏が多くて、苛立ちの連続であった。それなのに、こんな欠陥の多い辞典が堂々と版を重ねて流通しており、今も初学者に勧める大学教師もあるようだから、まったく驚いてしまう。わが家に置いてある薄手の古い字引、かの「急就篇」で戦前よく知られた書肆という文求堂の主人・田中慶太郎編の「支那文を讀む爲の漢字典」(文求堂)一冊を携えてきたら、どんなにか便利だろうと旅行中しばしば思ったものである。

私のように戦後世代とはいえ、中国語をウェード式と注音符號で習った者には、昨今の拼音一本やりの辞典にはどうしてもなじめない。ウェード式も注音符號も、中国語学史上の優れた文化遺産なのであるから、少なくとも、これらでも引けるようにページの上の余白に併記すべきであろう。

近頃はウェード式をまったく知らない大学院生がいて、これで英文の研究論文など読めるのかと思うのだが、数年まえ、ハーバード大学での「ケンブリッジ中国史叢書」(Cambridge History of China)執筆者セミナーで、中国学の粋を集めたこの叢書では、人名、地名などの表記に、たとえばMao Tse-tungがMao Zedongとなる拼音を拒否し、断固ウェード式で行こうと衆議一決したことは痛快だった。その会議は、右叢書の現代中国の巻(第十四、十五巻)の執筆者が、あまりにも著名な碩学にして今日なお矍鑠たるジョン・K・フェアバンク教授のもとに集ったものであり、論点が多岐にわたって論争も目立ったが、是非ウェード式をとる私の念願にはフェアバンク教授をはじめほぼ全員が同意見であった。

ウェード式を考案したイギリスの外交官トーマス・ウェード(一八一八-九五)は、退官後ケンブリッジ大学の初代中国語教授になったが、アーネスト・サトウの日記を編じ続けている畏友の萩原延壽氏の文章にも数年前に彼が登場したので、「朝日新聞」連載「遠い崖」参照、私は大いに喜んで萩原氏に電話したほどである。

いまやウェード式を知る中国語習者も少なくなりつつあると思うが、右のような私なりの感想からすると、携帯用の現行の中国語辞典は、どれも一長一短であり、結局は、もともと信頼されている辞書としての「中日大辞典」(大修館書店)の簡約版を、できればウェード式と注音符號も併記して是非早急に出版してほしいと願わずにはいられない。これは何も大修館書店へのリップ・サービスなどではなく、一読者の切実な要望である。



(なかじま みねお・現代中国学)